

## 縄文土器における 型式変化の動態的構造

可 児 直 典

1. 型式変化は、我々が遺物を観察する際に、さまざまなレベルにおいて、相対的な相違として反映されている。本稿が、型式変化に注目するのは、型式が変化することに、「文化」が見いだせるからである。
2. 本稿の目的は、型式変化から土器の広域化、地域分化における現象の過程やその性質に関して、合理的な説明を掲示することである。

縄文土器は、地域編年や広域編年の充実から、ホライズン (Horizon) 形成期と中間期、あるいは、広域化と地域分化を繰り返すことが知られている。ホライズン形成期、中間期と広域化、地域分化の関係については、前者が静態的な意味を持つのに対して、後者は、過程を示す用語であり、動態的な意味を持つ。

さて、草創期や早期は、地域編年の不備があり、広域編年が確立していないため、広域化や地域分化については不明な点が多い。しかし、「典型的縄文文化の繁栄した」前期以降は、九州地方を含めた、汎西日本において、広域化と地域分化が明確に繰り返される。これについて、広域化から地域分化に至る一連の過程を Series と定義した場合、次の5つの Series にまとめることができる。

- 1 Series 「竹管文1期」(前期初頭～前期中葉)  
近畿編年では、羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱc式期
- 2 Series 「竹管文2期」(前期後葉～中期後葉)

- 近畿編年では、北白川下層Ⅲ式期～里木Ⅱ・Ⅲ式期
- 3 Series 「磨消縄文・縁帯文期」(中期末～後期中葉)
- 近畿編年では、北白川C式～一乗寺K式期
- 4 Series 「凹線文期」(後期後葉～晩期中葉)
- 近畿編年では、元住吉山Ⅱ式～滋賀里Ⅲ式期
- 5 Series 「突帯文期」(晩期後葉)
- 近畿編年では、滋賀里Ⅳ式～長原式期

本稿では、特に、「竹管文2期」と呼称した2 Series について、その現象の過程と性質を説明する。2 Series を論じる理由は、近年における当該期の東海編年や九州編年の改訂から、広域編年の確立の必要性が生じていることが大きい。なお、扱う地域は、本稿の主旨により、九州地方から中部地方西部までとした。

3. 広域化や地域分化の現象を説明するためには、地域編年と広域編年の構築が必要である。よって、地域編年と広域編年の構築の方法を述べたい。

地域編年は、各地域ごとに、系統を見出すことから始める。そして、各系統ごとに時間軸の基軸として一定方向の変化を見出して組列化する。これを通時性の証明とする。型式変化は、その方向性(系譜)を示すものとして、変化要因に内的要因と外的要因を提示した。共時性については一括遺物、遺跡の引き算のほかに、文様施文技法、文様表出技法、文様帯構成原理の同時性から行った。この通時性と共時性により、地域毎に評価による「段階」を設定した。

広域編年は、各地域の併行関係を捉えるために、「期」を設定した。近畿地方や瀬戸内地方の各段階を「期」に昇格させて、中部地方西部と九州地方との併行関係を構築した。

4. 前述した方法から、九州地方から中部地方西部の地域編年と広域編年を構築して、これを基に、2 series の広域化と地域分化現象と、その性質について説明した。個々の事例は、本稿を参照していただきたい。

5. まとめとして、広域化と地域分化現象について、一般化を試み、以下のように理解した。

**広域化現象** 型式学的には、広域化の母体となる地域の型式変化が内的展開することにより外的要因を規制し、隣接する地域（広域化に組み込まれる地域）の型式変化に影響を与えることが認められる。これは、「広域化の母体となる地域の関係性を強化しながら、新に、隣接する地域（広域化に組み込まれる地域）との関係性を強化していく過程」として理解できる。

**地域分化現象** 型式学的には、広域化の母体になった地域の型式変化において、内的要因よりも、外的要因が大きく作用していくことが認められる。広域化に組み込まれた地域の型式変化は、広域化の母体となった地域よりも、いち早く外的要因が大きく作用する。これは、「広域化の母体となった地域との関係性よりも隣接する地域（広域化に組み込まれた地域）との関係性を強化する過程」として理解できる。

6. また、広域化と地域分化現象の性質についても、一般化を試みた。広域化現象では、広域化の母体となる地域よりも、隣接する地域（広域化に組み込まれる地域）における型式変化の外的要因に、地域分化現象では、広域化の母体となった地域における型式変化の外的要因の程度にその性質が見られる。外的要因による程度は、地域における型式変化の外

的要因を引き起こす要素、つまり、外的要素の受容形態に現れると思われる、次の4形態（A形態からD形態）に大別した。

A形態 当地方で主体となる土器に、文様要素が受容される。

B形態 当地方で主体となる土器に、文様要素と器形（製作技法）が容される。

C形態 当地方で主体となる土器に、文様帯区画と器形（製作技法）が受容される。

D形態 ほほ全面的に受容される。

A形態からD形態の差異について、根底には、当地方で持っている他の地域との関係性に規定されるものである。A形態からC形態は、ある地方で外的要素を受容する際に、その地域における（価値体系などの）伝統が規定要因になり、選択的に受容される場合である。この場合は、受容側が積極的となると考えても良いかと思われる。型式学的には、当地方の主体となる土器に連続性が認められる。D形態は、言い換えると、当地方への貫入的波及となり、この場合は、受容側が消極的となると考えても良いかと思われる。型式学的には、連続性が認められない。

そして、こうしたA形態やD形態の違いや、A形態からC形態で示したように、受容される要素やその要素の組み合わせにより、広域化や地域分化現象の性質が異なってくると理解した。